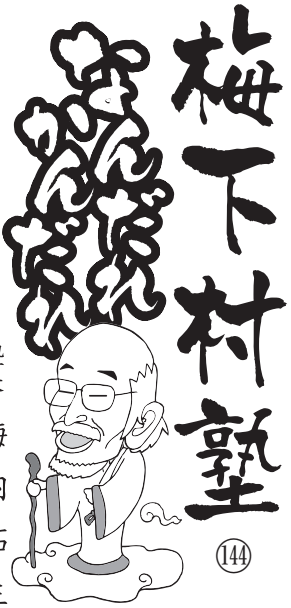
梅下村塾 ⑭④



塾長　梅内拓生

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～

（心と魂の底脈）

２０１２年５月に大船渡市と気仙沼市で開催された「森と水と命の惑星」国際会議で決議されたものは会議参加者の心と魂の底脈に引き継がれている。

国際保健学領域の研究を行っていた東京大学大学院や北里大学の共同研究者数名との世界の地域文化価値研究が継続しており、地域文化を日本語の５７５と英語の短い三行詩に詠む活動が継続されている。これは世界の歴史と地域文化の底脈をなす心と魂の探求と創出が続いていることを示している。

地球レベルの異常気象、戦争やテロ、電子メディアによる情報侵略などエゴイズムのグローバル化が顕現している。この状況は世界の歴史に見られた末法思想の蟠踞（ばんきょ）していた時代にも似ている。２０１４年の冬季オリンピック・パラリンピックの開催地チェチェンの隣の国ウクライナでの政治混乱、中国での無差別テロ事件、国連安保理常任理事国をはじめとする既得権益の温存のための対応への二枚舌、三枚舌の行使、ビットコインなど手の込んだ詐欺、まさに末法思想の蟠踞の時代を呈している。

事実を歪曲（わいきょく）した「告げ口外交」や「押し付け宣伝外交」はこの嘆かわしい状況への「火に油」を誘導している。梅下村塾（１４１）で述べた「英国人記者が見た連合国戦勝史観の虚妄」をもう一度熟読してみると、気仙地方の歴史と文化の奥の（心と魂の底脈）に触れ、これを基に世界に向けてのメッセージを創出することが急務であることに気がつくと思う。「森と水と命の惑星」国際会議で決議されたものは会議参加者の心と魂の底脈に引き継がれている。

「一言は世界に響く」

（復興への掛け合い）

議論の場　出席するのも　ままならず
（圭一）

物言へば　唇寒し　秋の風
（芭蕉）

自分の言葉が他人に響くのは難しいものです。圭一と芭蕉の言葉への思いは日常生活のことばと道を探求する人の言葉への思いの深さのちがいでしょうか。

返　句

復興の　掛け合い寒し　秋の風

（希望の灯）

震災の　思わぬご縁に　感謝する
（圭一）

縁は異なもの　味なもの
（ことわざ）

道を行く時、見知らぬ人と袖が触れ合う程度のことも、前世からの因縁によるものなのでしょうか。（希望の灯）は歓迎したいですね。

返　句

袖刷り合うも多生の縁
（ことわざ）

（地球文明の問題）

文明の　危機はせまれど　日々のあり
（拓生）

知らぬが仏
（ことわざ）

無常観の世界ですめば、会うは別れの始めとして受け取るか、現実問題として受け止めるか、まずは暮らしですね。

返　句

仏あり　日々の生活命あり

（人口増加と文明の存続）

いままさに　この時代に生きる　使命とは
（圭一）

暖簾に腕押し
（ことわざ）

複雑に絡み合っている現代文明の中での使命を感じ、考え、育て、実行することは容易なことではありません。往々にして使命は空回りをします。

返　句

異常気象　オオカミ少年　空叫び

「森と水と命の惑星」国際学会の仲間から

春の風　草木をｓｗｉｎｇ　ＪＡＺＺ魂
（朋也）

車窓から　眺める景色に　未来思う
（朋也）

自由なジャズの世界に羽ばたいております。

返　句

春風に乗り　新幹線ｓｗｉｎｇ　ＪＡＺＺ

国際学会の仲間と一緒に働いたことを思うたびに中国の孔子の言葉「朋遠方より来たるあり、亦楽しからずや」が思い出されます。

（東海新報記事から）

３月２日の世迷言は自虐史観から抜けきらない日本の社会もようやく、この事態からの脱却を真剣に考え始めていることを述べている。まさに梅下村塾の根底に流れている「心と魂の底脈」に響き合っている。梅下村塾（１４１）で述べた「英国人記者が見た連合国戦勝史観の虚妄」はぜひ是非熟読することを期待する。